

異業種交流と地域活性化

— 地域の幸福度から未来価値を考える —

株式会社ウイル代表取締役

奥 山 睦

皆さん、こんにちは。株式会社ウイルの奥山と申します。東京都大田区から参りました。結構名古屋は近くて、私のところは品川から乗るんですけども、品川からドア・ツー・ドアで10分しか掛からないんですよ。だから、名古屋まで本当に都内でも遠いところに行くよりも近い感じで来られるので、とても便利に来させていただきました。向日先生とのお付き合いは、そうですね、経営情報学会っていうところのお付き合いをさせていただいて、もうかれこれ10年近くになりますでしょうかね。そんな感じで今回ご依頼をいただきました。どうもありがとうございます。私もいくつかの大学で教鞭を執ってたりするので、若い学生さん達と接するとすごく嬉しいです。ちなみにうちの息子は26歳なので、皆それより若いなっていう感じなんですけど、よろしくお願ひします。じゃあ早速始めさせていただきますと思います。

まず、今回の講演内容なんですけど、ざっくり分けてこんな感じです。初めにちょっと私の自己紹介だけさせていただきますので、大田区から来ておりますので、地域を考える際に、やはり地域事例を出しますから、大田区ってこんな地域だよっていうことを頭に入れていただいた上で、事例の1番「下町ボブスレー」、2番「未来シャッター」っていうのを、お聞きいただきたいと思います。下町ボブスレーって今年の初めにすごく話題になりましたよね。ジャマイカの不採用になって、



散々テレビ、新聞を賑わしたものだんですけど、これ実際じゃあ失敗事例なのっていうところから考えてみたいと思います。あともう1つ、よりよい未来社会のために私達はどういうふうに考えて、どういうふうに動いたらいいのかっていうお話を少しだけ最後にさせていただきますと思います。

はい、では、最初に簡単な自己紹介です。株式会社ウイルというのは、出版物だとかWEBサイトの制作を主にやっております。あとお客様のご依頼によって地域ブランドの構築だとか、こういう講演の機会をいただいたりというふうにしております。

私のキャリアは相当変わってましてですね、実は4年生の大学は武蔵野美術大学というところの油絵科出身なんです。まず、これで「えっ」って思いますよね。大学院が実は法政大学の大学院の政策創造研究科で、雇用政策を勉強しました。それで政策学修士を取っています。実はまだ、院生なんですけどね。

ここに書いてありますけど、慶應義塾大学大学院のシステムデザイン・マネジメント研究科というところの今、博士課程に行っております。これは行った理由があるんですね、実は。何で今さらみたいなの、この歳でみたいなのはあるんですけど、システムデザイン・マネジメントというのは、所謂、社会学と工学を合体させたような文理融合の研究科です。先程向日先生の方からご紹介ありましたように、静岡大学の大学院で客員教授をさせていただいているのと、日本女子大の家政経済学科というところで非常勤講師をやらせていただいています。あとは国家資格のキャリアコンサルタントの資格保持者なので、よく学生さん達のキャリア相談、特に日本女子大なんか本当によくキャリア相談に乗っています。で、日本生産性本部認定のメンタルサポーターとあって、所謂、メンタル面のちょっと問題のある方のご相談に乗っていると。異業種交流グループ連絡会って大田区にあるんですけれども、これは製造業を中心に約70社が加盟しているグループで、30年続いているグループです。私は入らせていただいて20年なんですけど、一応そこの会長をやらせていただいているのと、大田女性ネットワーク TES という、この異業種グループの中の1グループなんですけど、女性経営者のグループの会長をしています。こんな経歴なんです。だから、ずっと長い間、異業種交流とか地域活性に関わってきたという感じですよ。

次に簡単に事業の紹介です。こんな本を書いたり、書籍の制作をしていますけど、もちろん制作会社なので、人様の本の編集、出版をすることもありますが、ここにラインナップしてあるのは全部私が書いた本です。大田区に関わる本、特に大田区の中小製造業に関わる本が非常に多くて、一番最初に書いたのは「メイド・イン・大田区」っていう本だったんですけど、私はこの本を書いたことによって、静岡大学の客員教授になりました。

た。なぜかという、この本はちょっと評価的には割と高くてですね、週刊ダイヤモンドの選ぶ「ベスト経済書」って毎年出てますよね、あれの2005年版のベスト経済書の1冊に選ばれたんですね。一番最初に自著で書いたものだったんですけど、それを見た静岡大学の先生が浜松っていうのは中小企業のやっぱり集積地だから、うちの大学では非「地域イノベーション」の授業をもってくれないかっていうことで始まりました。あとキャリアの関係の本を書いております。これが2017年、去年発刊したばかりの本なんです。

で、左側の赤い本が「35歳からの女性のハッピーキャリア」。これは、やっぱりキャリアの本です。キャリアの本を分かり易く感じて、「持つ」、「始める」、「変える」、「捨てる」という4つの視点で書いています。これが人生戦略。ちょっと注目していただきたいのが、推薦文が菊池桃子さんが書かれてるんです。なぜかという、大学院の後輩なんです。法政大学の大学院の後輩で、彼女が法政大学に進んだのは、私のところにキャリア相談に来たのがきっかけだったんです。それ以来もう10年ぐらい付き合っていて、年に数回お会いして、色々とお互いに情報交換をしたりしている仲です。

「働き方の問題地図」という最新刊なんですけど、昨年の12月の末に、書いたものなんです。これビジネス書としては結構売れて、お蔭様で3万5千部ぐらい売れたんですね。ビジネス書でね、1万部いくって結構大変なんです。発売10日で実は増刷になりまして、発売10日で2万部売れました。だから、1年かけて3万5千ぐらい出たんですけど、これは私が中学のリアルな後輩と一緒に書いたんですね。沢渡あまね君という。で、私の名前が奥山陸というので、「どっちが男で、どっちが女？」ってよく言われています。これは今言われている、働き方改革について、何が問題点なの？それを男女の視点

から斬っていこうということで、企画して作ったのがこの本です。

その他にですね、WEBサイトの制作だとか、運営、保守。例えば、国立科学技術振興機構ってところの中国語サイトで、日本の中小企業の優れた情報を中国語で発信するっていうことをやっています。あとはうちの社員がですね、大田区役所に出向してまして、大田区のホームページを毎日の更新をしていたりだとか、あとは厚生労働省だとか横浜市のワーク・ライフ・バランスとか男女平等参画のサイトの運営なんかもさせていただいております。

あとは、今、私が話しているような講演とか研修とか大学の授業なんかもいくつか行っています。皆さんにこういうふうにお会いできたのも、この仕事のおかげですね。あと地域活性プロデュースっていうことで、実は2015年には1年間、福島のものづくりブランドの構築に関わりました。これは復興庁の流れから来たものなんですけど、運営主体は福島県の鉄工機械工業組合というところでした。ここで、被災地が立ち上がって、次のブランドを作るためにどうしたらいいか、1年間やったんですね。まず最初にブランドを作っちゃうじゃなくて、ブランドを作るための考え方だとか、色々ブランドの先進地に行って見学をしたりだとか、1年間かけて学びをやったっていうことなんです。で、2年目に一応ブランド品が出来上がったってような、そんな感じでした。そんな事業に関わらせていただいたんですね。これはだから、毎月福島に、月2、3回行っていたって時期もありました。

あとこれは、今年の1月にリリースしたんですけれども、ウイルコンテンツっていうもので、早い話が多言語サービスです。英語と中国語ですね、特にね。中国語のサイトを長くやっているっていうことと、英語はですね、実は学会は海外で発表したりとかしているので、そこそこそれなりにできるかなって



いう、所謂、プロデューサーができるかなってところなので、一応これの事業をやっております。で、これは国際学会をスウェーデンで、2016年は大田区に関する発表と、2017年は墨田区の産業集積について発表しました。そしたら、墨田区の産業集積の発表をしたら、2020年、墨田区に初めて、i専門職大学っていう大学ができるんですね。墨田区に大学がなかったんですね。一応その教員になることが内定しています。そんな感じで、地元に係りたりして、色々な地域をこう見ながら、研究や仕事を進めてきたってところでございます。それで、サラリーウーマンから起業して。起業したのは1990年ですかね、28年ですね。育児も越えてきました。それから、資格取得もしてきました。大学で教える、学ぶ。それから、自らの病気や介護などを経て今がありますっていうことなんです。

学生さんがいるので、ちょっとだけこの話をしたいと思います。私は最初に慶應大学の博士課程に行ってるって言ったじゃないですか。それなぜ行ったかっていうのは理由があるんですね。私、4年前に大病を患ったんですよ。脳梗塞を患ったんです。今は全然そう見えないでしょ。でも、実は右半身にまだ麻痺があるんですね。人の見えないところに。最初は立てなかったんです。会社で倒れて、1年は立てなかったんですね。で、食事療法と運動療法を徹底して、なんとか回復してきました。運動療法って歩けないから、

プールで水中歩行をするところから始めたんですね。最初少し歩ける、電車に乗れる、出張に行けるっていうふうに、短期的に目標を積み重ねていきました。それで、栄養価にもすごく気を付けて、それまで外食だとか、食事時間ばらばらだったんですけど、ほとんど昼はもう自分でお弁当を作って、ウェイトコントロールしながらやるっていうのを1年間続けました。

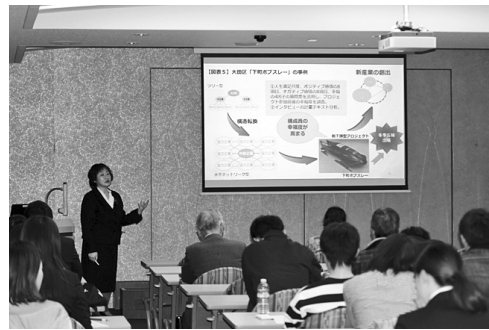
そしたら、びっくりするぐらい数値が良くなったんですよ。歩けなかったのが歩けるようになり、色んなことができたんですね。右に麻痺が出るって知ってますか。左脳やられてるんですよ。左脳っていうのは、要は思考と言語じゃないですか。私の場合は幸か不幸か、倒れたときに言語障害が全くなかったんですね。全くなかったために、医療ミスがあったんです。要は多分そのときにもう脳梗塞起きてたと思うんですけども、整形外科の方に回されてしまって、全く関係のない治療を2ヶ月間やったんですね。で、そのときに緊急性がないということで、2ヶ月後に結局打ち切られてしまったんですね。それで、ある日突然右の半身が痺れ始めまして、特に顔面麻痺ができたんですね。痛覚がなくなって、掻いても掻いても痛覚がないから血だらけになって、これ絶対おかしいと思って、セカンドオピニオンに行ったんですよ。もうこれ絶対に脳が悪いと思って、脳神経外科に行きました。そしたら、「6つも梗塞できてます」って言われたんです。「よく死ななかつたね」って。で、そのときですね、実は国際学会に行く3週間前だったんです。で、そのために結構頑張って、英語で論文を書いて、「ああこれから頑張ろう」と思った矢先、当然ドクターストップかかりました。ドクターストップかかって、その後もやっぱり1年間はずっと復帰はできなかつたんです。でも、だんだん半年経ち、8ヶ月経ち、10ヶ月経ちっていうところで、良くなってくるのが目に見えて分かったんです。でね、運動療法

と食事療法で良くなったんだから、最後左脳やられたから、やっぱり脳トレをやろうと思って博士課程に行ったんです。それが私が博士課程に行こうと思ったきっかけだったんです。でも、当時は右の感覚がちょっとおかしかったんで、パソコンが打てなかつたんですよ。だから、携帯の音声入力で会社には色んな指示を出してやっていたんですね。そしたら、不思議なものでね、会社の社員達がね、すごいやる気になって、その年、私が病気で倒れた年は、過去3年間で売り上げ的に一番良かったんですね。社員達はその分、これは社長の一大事だって言って、本当に頑張ってくれたんですね。あと外注スタッフも頑張ってくれました。で、思ったんですけど、今も正直言って100%健康かって言ったら、健康じゃないんですよ。まだ麻痺が残ってますから。しかも、ちょっと人には全く見えない麻痺なので、足を引きずったり、その程度なんですけどね。でもね、なんか思ったんですけどね、さんまさんじゃないけど、生きてるだけで丸儲けだなと思って。で、残されたリソースで、最大限の効果を求めていくってことはできるなと思って。で、博士課程も別にそんなにガリ勉強したわけじゃなくて、英語の勉強だけだったんですよ、したのは。正直言って、慶應って英語の試験がちょっと難しいので、それだけ勉強したんですね。1年間何やったかっていうと、朝のたった15分のラジオ英会話、それを1年間続けてただけです。でも、一応それで脳トレやろうと思って頑張ってたんですね。忘れもしませんが、その倒れてから10ヶ月目に合格通知をもらいました。で、今もちょっと研究を続けながら、会社経営を続けながら、また、他の学校で教えながらの生活をしています。それはやっぱり残されたリソースでどれだけこれから私が生きていけるか。そのときに思ったのは、生きていける期限ってあるんだなって思ったんですよ。そのときに一番自分が何をやりたかったかっていうこ

とをちょっと見つけたっていう感じがして、やっぱり、うん、研究はやりたいなと思いついて、そっちの道も選びました。ということで、今があるということです。はい、ちょっと長くなりました。

まず、大田区についてご説明をさせていただきたいと思います。大田区っていうのは面積的には23区で最大なんです。品川区、目黒区、世田谷区、神奈川県が隣接しています。所謂、京浜工業地帯と言ってしまうたら分かり易いかもしれないですね。人口は72万人ちょっと。これすごい多いんですよ。区ですよ。政令指定都市って80万人でしょ。それに近いんですよ、72万人。10年前はどのぐらいだったかというと、65万人だったんです。増えてるんです。この人口減少時代に。なぜでしょうか。この最たる原因は外国人の流入なんです。で、特に大田区で一番多いのはネパール人です。大田区っていうのはやっぱり町工場の歴史があって、町工場が栄えて、そこに飲食業がすごい栄えていたんですね。今でも蒲田とかそういったところはそういう飲食業がすごく多いんですけど、そこに非常に外国人が入ってきています。勿論、製造現場に入ってるっていうのもあるんですけど、それ以上に飲食業に入っています。工場数は3,481ってなってます。これ最盛期、1987年ぐらいだったと思うんですけど、約1万社です。だから、3分の1まで減っています。これが現状です。

続きまして大田区っていうのは、大森区、蒲田区っていうのと合体して大田区になったんですね。よく点を付けられちゃうんですけど、太田市っていうのは点が付いているのがあるんですけど、これは群馬なんですね。江戸から大正の初めは農漁村でした。で、大正半ばから市街地化して、近代国家へ進む過程で東京の都市機能が膨張してきました。その後、関東大震災が起きたんですよ。昭和初期は軍需工場の進出により工業化が進みます。正直言って戦争と共に歩んできたんです



ね、この町は。終戦後は復興とか高度成長による工場の集積。で、最盛期は1万社。で、昭和後期から現在なんですけど、諸要因による工場数の従業員の減少なんて書いてあります。言ってみれば、産業の空洞化ですよ。アジア諸国に仕事が流れちゃったっていうことなんです。こういう影響はもろに受けています。

次に大きな特徴です。まず交通利便性が高い。羽田空港があります。で、新幹線もあれなんです。品川区なんですけど、やっぱりそこも近いんですよ、すごく。公園・緑地、買い物、レジャーなどが充実している。あとね、面白いデータがあって、昼間人口と夜間人口ってあるじゃないですか。昼間にいるそこの地域の人口と夜間にそこにいる人口、大田区ほとんど変わらないんですよ。98%なんです。どういうこと？要はその町に住んで、その町で働いているっていうケースがすごく多いんですね。これはすごい特徴かなと思います。

歴史とか史跡に関しては、池上本門寺だとか洗足池なんていう有名な、これは世界的にも有名なところがあります。商店街、銭湯に関しては23区で最も多いです。で、黒湯と呼ばれる有名な温泉もあります。で、公園・緑地に関しては、多摩川っていう大きな川があります。そこに緑地が、広大な緑地が広がっています。あと子育て、教育環境を言ったら、子供の貧困対策。どういうことだと思いますか。今、話題になっている、こども食

堂ありますでしょ。大田区発祥なんですよ、実は。大田区の「八百屋だんだん」っていうところが、ある日、小学校の副校長先生の話聞いて、1日にバナナ1本で過ごしている子供がいると。何とかしたいんだと。で、八百屋さんだった私の友人で、近藤博子さんっていう方がその話を聞いて、何とかしたいって言って、まず、民間が始めたのがこども食堂なんですね。今、後追いついてますよね。行政とか色んなNPOとか。ですから、この子供の貧困対策にいち早く取り組んだ、こども食堂の創始したところは大田区なんです。

東工大とか東京工科大なんかも一応区の中にはあって、割と充実しているというか、ありますよね、そういうところが。で、何と言っても有名なのは、ものづくりですよ。歴代の首相になった方は必ず大田区の町工場に来て、製造体験をして、にっこりこう、ピースサインなんか工場で作るっていうのは、写真撮るっていうのはね、デファクトスタンダードだとよく言われています。だから、ここの人達のハートを掴めば、日本のその製造業のハートを掴めるんじゃないかというね、歴代の首相の計算がありますね。こんな感じですよ、大体。

で、何と言っても羽田空港。ざっくりこうやって書いてありますけど、現在の就航先は世界31都市。で、2020年、オリンピックイヤーに向けてさらに増えるんですよ。そういう見込みがあります。今、ざっと書いてありますが、こういうところに飛んでるわけですよ。羽田空港面白いですよ。どんどん、どんどん変わっていきますね。羽田空港のところにも今、その大田区で大きな計画がありまして、そこで医療機関だとかそういったものも作る、海外の人向けの、インバウンド政策、そういう計画もあがっています。まず、大田区ってこういうところなんだっていうことをちょっと頭に入れていただきながら、次の事例の話聞いていただけたらと思いま

す。

はい、事例1「水平ネットワーク型連携による構成員の幸福度向上と地域産業活性化」ということで、私、これを実はずっと7年ぐらい追いかけていて、「下町ボブスレー」のネットワークを。で、今年の2月にすごいこけてしましましてね。知っていらっしゃる方いますか。「下町ボブスレー」ってご存知の方いらっしゃいますか。名前は聞いたことありますよね。結構ニュースになりましたよね。2ちゃんねるなんかでも騒がれて、結構見たりしました。ここにジャマイカの選手がいたりしますね。ジャマイカに使われるんじゃないか、期待をもったんです。残念ながららって感じでした。じゃあこれって本当に失敗事例なのっていうところから、ちょっと考えてみたいと思います。内容はこんな感じですよ。これははしょりましてですね、中小企業の現状っていうのは、皆さんもうここにいらっしゃる方は詳しいかもしれないですけど、日本における中小企業数は企業数の99.7%を占めていますね。大企業のイメージしかないじゃないですか、ニュースとかで流れるのは。従業員数においては、66%を占めている。ということは、日本ってほとんどの占めている割合って中小企業なんだっていうのが分かると思います。で、問題点もあります。アジア諸国のキャッチアップの影響ということなんですけど、新興国の企業との競争激化。特に中国、韓国ね。そういったところのものから、親企業は日本国内の下請け中小企業を選択していく傾向にある。今まで親子の関係だったのが、それがなくなっていったわけなんですよ。それはずっと続いていて、あと少子高齢化による急速な人口減少の問題。これはもうどこの土地へ行ってもそうですよね。2060年には、要は生産年齢人口、15歳から64歳は50%になるっていうふうに言われています。一方、高齢人口はどんどん増えていくわけですよ。2060年には39.9%。即ち、2.5人に1人が65歳以上にな

るということです。ということは、一言で言うと、国内だけの需要とか人材の確保、厳しいですよ。じゃあどうしたらいいのっていうところなんです。水平ネットワークっていう言葉を使いました。これの定義です。これはあとでざっと読んで下さい。要はピラミッド型と水平型ってあるんですけど、ピラミッド型っていうのは、親がいて子がいて孫もいてってこういう、ヒエラルキー作るじゃないですか。水平ネットワークっていうのは、要は平行な関係なので、ヒエラルキーを作らないんです。その定義です。これは後でざっと読んでおいて下さい。

「共通の目的のために組織の限界を越えて、公式、非公式を問わず、メンバーシップが限られた中で意識的に調整された2人以上の人間の活動や諸力の体系である」と。というふうに西口さんという方はおっしゃってます。定義のイメージとしては、図を頭の中で考えていただくと分かり易いと思います。で、下請け中小企業比率ってこういうふうになるんですね。黄色が製造業ですね。ブルーがサービス業です。見て下さい。今、サービス業の方が実は若干多いんですよ。昔は圧倒的に製造業が多かったんですけど、ただ、これには1つあって、製造業が減ってサービス業が増えてるっていう絶対的な数ですね、そういうものもあります。そのなぜその下請けになるのっていうところなんですけど、ここに書いてある通りなんです。メリットがあるから下請け企業ってあるんですよ。例えばね、これ中小企業白書の言葉そのものなんですけど、新たな取引先を開拓する営業活動をしなくてよい。小さい企業さんっていうのは、社長がトップセールスをして、営業部をもたない企業さんがたくさんあるんですよ。そういうところにとっては、営業しないでいいっていうのはとっても楽なんです。これはメリットとしてあります。取引先との取引条件、交渉等の雑事を省ける。これも阿吽の呼吸で、できるっていうところもあります

よね。過去の取引の経験やノウハウを活かせる。相手先の有する技術や技能、設備を理解しやすい。それから、人的交流等を通じて、相手企業の情報が入手しやすい。これは長い取引関係の下請けさんってやっぱりそういうところがあって、結構おいしいんですよ。それは、企業にとって。安心して仕事、持ちつ持たれつみたいな。デメリットも反対にあります。既存の取引先との競合相手と新たな顧客開拓が難しいという、勿論ですよ、あと価格条件等の取引条件の変更が難しい。一度決められちゃったら中々、例えば、単価高くできないとかね、そういうところに表れてきます。過去の経験等から無理な注文を押し付けられる。短納期でね、ぱっと押し付けられたりするわけですよ。難しい案件をね。あとは現在の自社の位置付けから脱却しにくい。これなんですよ。皆苦しいんですよ。脱下請け、これを考えてやっぱりやっているんですね。ちなみに、私、自分のキャリアは変だって言ったんですけど、私の母が画家だったんですね。もう去年亡くなってしまったんです。父は弁護士だったんですよ。で、祖父は横浜で、所謂、中小製造業を創業したオーナーで今、4代目なんですよ。横浜でもう75周年、今年迎えました。そういうところで育っているの、このメリット、デメリットっていうのも、もう何か実体験として分かるんですよ。こんな話がありました。うちの会社が50周年を迎えたときに、某大手企業さんに「50周年の記念のパーティーをやりたい」って言ったんです。そのときに返ってきた言葉、「そんなパーティーをやるお金があるんだったら、もうちょっと単価下げられない？」って言われたんです。そのときにとった施策は、やはりこの1社に依存するのは止めようって、つくづく思ったんですね。50年までは本当に1社におんぶに抱っこだったんですよ。「下町ロケット」に出てくる帝國重工みたいなところだったんですけども、それを1社スポンサーを止めて、50年を境



にたくさん取引先を分散していった。それで、75年生き残ってきたんですね。もしそのまんま1社でいったら、死んでたかもしれません、会社として。ただ、ひょっとしたらその一言で本当にひどい一言を言われて、私もう、その言葉を聞いたときに、「本当に何てことを言うんだろうな」と思ったんですが、その一言があったから、自社の位置っていうのをある程度認識でき、次何をしたらいいのかっていうのも、やっぱり認識できたって思ってますね。

はい、では、下請け中小企業の構造転換っていうこと。これが所謂、ツリー型。大企業があって、子会社があって、孫会社があって、こっちにもひ孫とか色々あると思うんですね。ところが、この水平ネットワーク型っていうのは、中核企業はあるんですけど、そこに協力企業が網の目のように張り巡らされていくっていうような、そんなイメージです。で、脱下請けしてもう、これをこういうふうに変換していくしかないんですよ。そのために、何かを作っていかなきゃいけない。従来の少数依存の垂直的なツリー型の下請け取引構造っていうのは、経済のグローバル化だとかIoTの進展を考えた場合、絶対に限界があります。そのため、この水平ネットワーク型に構造転換を図っていかなきゃいけないと。それが中小製造業の所謂、継続的な経営、それから地域産業を発展させていく牽引力になるんじゃないかっていうことなんですよ。で、私は考えました。企業

連携による水平ネットワーク型プロジェクトへの参画が有効である。それから、プロジェクトの発展していく中で、これちょっと注目していただきたいんですけど、構成員の幸福度が高まるという仮説を設定して、下町ボブスレーの事例から検証しました。これね、日本の学会と国際学会にも発表しているもののダイジェストです。これで見ただくと、多分すごく分かり易いと思います。今まではこういうツリー型でしたよね。ヒエラルキーを作った形でしか所謂、中小製造業は生きられませんでしたよね。これを何とか構造転換、水平ネットワーク型にします。ヒエラルキーを作らない形にして、できたのが大田区の場合、この下町ボブスレーというものでした。で、このネットワークを運営している間に、この構成員の幸福度が高まってきたんですね。で、1つの目指す地点としては、冬季五輪の出場でした。これは叶いませませんでした。しかし、これが実は全てじゃないんです。今、大田区で起こっているリアルタイムのことを今回は紹介しようと思っています。これを作ったことによって新たなビジネスが生まれているんです。これは五輪出場場で考えちゃったら失敗ですよ。でも、違うんですよ。ゴールはここじゃないんです。新産業創出なんです。地域活性化って、新産業の創出がされて、そこで雇用が確保されたときにやはり成功だと思うんですよ。それで、私はこのプロジェクトのメンバーに7年ぐらい密着取材して、人生満足尺度、ポジティブ感情の8項目、ネガティブ感情の8項目、幸福の4因子っていう要素で、この質問票を作成して、プロジェクトの参加前と後で、どう幸福度が変わったのかっていうのを検証してみました。そのインタビューの計量のテキスト分析もしてみました。じゃあちょっとプロジェクトの簡単な説明をします。既に新聞なんかでもよく取り上げられたので知ってるかもしれないんですけど、大田区の著名な企業約100社が集まりまして、大田ブランド企業と

言ってるんですけど、それとF1マシーンの製造を手掛けている東レ・カーボンマジック、このね、上物、炭素繊維が必要なこの上物は東レ・カーボンマジックが作ってるんですね。この下の金属部品ですね。下と中の金属部品は大田区でやっているんですね。あと空力解析ソフトによる解析を行うソフトウェアクレイドル。これ国産の空力解析を行うソフトを作っている会社で品川にあるんですね。本社は大阪にあります。で、東大の大学院の研究室。で、事務局として公益財団法人大田区産業振興協会っていうところが絡んでいます。これらが共同で日本製のボブスレーのソリを開発して、冬季の五輪を目指すプロジェクトということで発足しました。ずらずらと書いてあるんですけど、ちょっと注目していただきたいところは、活動に賛同した地域内外からの寄付金っていうのは、2018年10月7日現在で295件あります。で、この金額です。2,400万円以上。で、フレーム部品は、全て町工場は無償で作っています。これは批判もありました。「何でタダで作るんだ」と。で、プロジェクトの広告経済効果は、約10億7,484万円です。会社の知名度向上、社員の仕事に対する意欲向上、参加企業間の取引が活発になった等の効果がありました。残念ながら2013年、2015年、日本ボブスレー・リュージュ・スケルトン連盟から2度の五輪不採択を受けます。それから、18年、これ早期で、ジャマイカボブスレー連盟にも五輪不採択を受けます。この結果だけ見ると、絶対失敗してるよねって思って、ボブスレー。ところが、そうじゃなかった。

これは公益財団法人大田区産業振興協会が公式に発表している結果なんですけど、メディアによる紹介の数、24年から26年だから今はもっと多いですよ、きっとね。これ露出量とそれを広告として計算した場合どのくらいになるかっていうと、合計で約10億7,484万円っていうことになってるんですね。これね、例えば、1社の中小企業がやって、

こんな数叩き出せるわけがないですよ。こういうプロジェクトがあったから、プロジェクトのこういうものが見えたから、これだけのものを叩き出せたわけですね。で、プロジェクト参加企業のアンケートっていうのも、この産業振興協会っていうところが公式に発表してるんですけど、1、2、3位を見ていただくと、「会社の知名度が向上した」。これが一番多いんですよ。続いて「社員の仕事に対する意欲向上に繋がった」。それから、「参加事業者間の取引が活発になった」。大田区の製造業のちょっと構造的なことを言いますと、従業員9人以下が8割。4人以下が4割なんです。ということは、中小でも限りなく零細に近いところ、そういうところが自分の会社の知名度のために宣伝PR打てるかって言ったら、絶対打てないです。それをこのプロジェクトが発足したために、色んなメディアに採り上げられ、色んな媒体にその下町ボブスレーの写真を使えるようになった。そうすると、取引先との営業トークも弾むわけですよ。これが1つすごい役立ったっていうことなんです。あと、所謂、消費財と生産財って言って、生産財っていうのはこの中に入っているネジ、バネ、チップとか、形になってないものね。で、消費財っていうのは、この携帯電話ですよ。目に見えるもの。大田区の企業さんっていうのはほとんど目に見えないものを作ってるんです。だから、自分の作ってる部品がどこに使われているかって実は分かってないでやってる企業さんがほとんどなんですよ。ということは、すごく難しいのは、この社員のモチベーションなんですよ。何作ってるか分かんない。でも、目に見えるもの、「ボブスレーのこの部品作ってるんだよ」って言えば、分かるわけですよ。何に使われているか。これすごいモチベーション向上になった。あともう1つは、参加事業所からの取引。約100社の集まりですから、その中で今まで知らない企業さん同士だったのが、非常に密な関係になっ

て、「じゃあこの部品はできるから、こっちお願い」って、実際の仕事でも取引が活発になったっていうのもデータで出てるんですね。

では、次です。ここなんです。下町ボブスレーから生まれた新たな事業。これエヌバイクっていうものなんですけど、この2014年からプロジェクトのメンバーの有志によって、クラウドファンディングを用いた新製品エヌバイクの試作が始まりました。で、横田信一郎さんっていうナイトペイジャーっていう会社の代表取締役なんですけど、この方が主軸となって、下町ボブスレーに関わったメンバーとメンバー以外の10社程度が参加して進められています。この横田さんっていう方は実はリーマンのときに1回会社潰してるんですよ。某大手企業さんの下請けだったんですね。すごくかわいそうだったのは、親から会社を事業承継してまだ1年も経ってないときに潰れてしまったんです。これね、ある日突然その会社からファックスが1枚送られてきたんですって。で、会社の事業評価ってその会社から書かれていて、ABCDEFGHIJぐらいいまであって、「あなたの会社はFランクです。ということは来月からうちの取引はここまでにさせていただきます」っていうのをファックス1枚で送られてきたんですって。その会社の収益がほぼ1社スポンサーだったんで、1ヶ月に2,000万あったのが、やがて200万になって、最後は20万まで下がったんですね。倒産ですよ。ところが、復活したんです。ここの会社、非常に技術力がいいっていうことで、スポンサーがついたんですよ。若手の経営者が出資して、500万出資して、「もう1回やろうよ」って言ってやったんですね。その若手経営者が元下町ボブスレーのプロジェクトリーダーだった細貝淳一さんっていう方なんです。彼のこういういい噂は全然流れないんですね、実はね。本当はそういうこともやってのけてるんです。500万出資して、技術力の

高かったこの人の会社をもう1回復活させるんです。本当に潰れてね、3ヶ月間ね、連絡がつかなかったんですよ。私もその経験、覚えてます。

次ですね。これエヌバイク。要はどういうことかって言うと、自転車とバイクの中間なんですけど、所謂、脚の力で駆動する機構で、歩くには遠いんだけど、短距離の移動に適していて、コンパクトに折りたためるから電車でも運べるっていう、そういうものなんです。クラウドファンディングで一応募集したところ、調達額の目標額だった100万円を超えて、試作を今も作り続けてるっていう感じです。あともう1つ、車椅子バスケット用の車椅子っていうのを開発しています。10社の大田区町工場が車椅子メーカーの松永製作所、これ岐阜県にあるんですけど、社長は身体障害者さんですよ。車椅子に実際乗っていらっしゃるんですね。車椅子のその制作では非常に知見があるということで、一緒に大田区の企業と組んで、これは車椅子バスケットボールチームのNO EXCUSEっていうところの協力を経て、既存の製品をベースとした車椅子バスケットボール競技用の選手用の椅子を開発しています。で、参加企業はこういう企業なんですけど、この赤字で書いてあるのがですね、下町ボブスレーの参加していたメンバーなんです。ちなみにこの株式会社エースさんっていうのは、製作グループのリーダーだった会社です。昭和製作所は2代目のプロジェクトのリーダーでした。マテリアルっていうのはゼネラルマネージャーでした。シナノ産業株式会社ハタダっていうところは、部品製作で協力しています。だから、過半数が下町ボブスレーのプロジェクトで、磨いていった知見とネットワークを活かして、こっちにも売り出しているっていうところなんです。で、本体フレームを軽量化しているっていうことと、キャスター部分ですね、ここの回転抵抗の低減で開発が完了しています。今年の3月30日に大

田区総合体育館ってところで、大田区のプロバスケットチームでアースフレンズ東京Zっていうのがあるんですけど、そこでデモンストレーションが行われたんですね。この白い部分が彼らが新たに開発したところみたいですよ。あとこれも最新のニュースかな、割と。NHKで紹介されたんですけどね、町工場3社からなるI・OTAっていう合同会社。それ以外の2社が参画して3案件が東南アジアのスタートアップと協業するってということで、NHKニュースでも大きく取り上げられました。で、株式会社フルハートジャパン、これがその社長なんです。あと株式会社エース、さっき紹介した下町ボブスレーの製作グループのリーダーでした。フルハートジャパンさんの國廣さんっていうのは、つい最近まで下町ボブスレーのリーダーでした。実行委員長だったんですね。だから、ジャマイカとの交渉は全部彼がやってたんですね。実は彼、留学経験があるので、英語がペラペラなんです。そういうのを活かしてですね、アジアのベンチャー企業と連携して新ビジネスを創造するということで、大田区が得意としていたこの仲間まわしですね。試作、製造、製品企画、設計、加工、これをやっていこうじゃないかと。で、特にIoTを活用してってところがポイントになっています。で、ペット用の車椅子の開発だとか、強度を高めたものっていうことですね。あとスポーツのライブ配信にドローンを使うなんていうのもちょっと今、やっているということなんです。で、2019年2月までにこの3社は試作を完成させて発表する計画なので、あともう少しだと思います。これを見る限り、私はこのプロジェクトが果たして失敗プロジェクトなのってすごく思ったんです。だって新たなこういう芽が出てきてるじゃないですか。7年間必死に自分達が作ってきて、すごいネットワークの中で、ものすごい話し合いを重ね、試作を作り、その中で培ってきたノウハウが、また、次の産業の創出に生きている

んですね。実はこれってすごい重要なことなんじゃないかなと思っていて、まだ成功、失敗は分かんない。

で、地域活性効果どのくらいあったのっていうところなんですけれども、実はこの下町ボブスレーっていうのは、商標登録、意匠登録を特許庁に大田区産業振興協会が出願済みです。で、ここに申請すれば無償で大田区の人には使えるんですよ、このロゴも。だから、私は自分の名刺にもこのロゴを付けています。その場合、プロジェクトの趣旨に賛同して、収益の一部を寄付するように産業振興協会では呼びかけている。でも、強制ではありません。その結果、何が出てきたか。下町ボブスレー菓子、揚げパン、寿司、酒、餃子、焼きそば、色々なものができたんですよ。商店街の活性化にも寄与していますね。で、2020年の東京五輪開催を睨んで、大田区では大田のお土産100選という製品、商品、事業者を検証する制度ができました。これここでも、下町ボブスレーのキーホルダーとかチョコQなんかを選定されています。

これが下町ボブスレーのロゴとそのキャラクターなんですね。これを無償で使えますよっていうことなんです。で、大田区はその責任はもちますよと。これで地域活性に使って下さいねっていうものなんですね。これ簡単な申請書を出せば使えるんですね、誰でも。で、関連商品です。揚げパン、ストラップ、チョコQ。これが笑っちゃうんですけど、お寿司、ボブスレー型したお寿司って。あと日本工学院って蒲田にあるんですけど、その学生さん達がこの応援Tシャツのデザインを作ってくれて、これで色んな試合に皆、臨んできていう感じですね。こういう関連グッズがもう本当に山のようにできました。で、紆余曲折を繰り返しながら、プロジェクトはツリー型からネットワーク型に構造転換していきました。その間2回、日本ボブスレー連盟から、それから、ジャマイカボブスレー連盟から五輪の不採択の宣告を受け



ましたが、製造は未だに継続しているんですね。で、これを起点にいくつかの製品開発のプロジェクトが立ち上がり、新産業の萌芽が生まれつつある。地域に様々な関連商品が開発されていて、地域活性に寄与している。これね、意外に知られてないんですね。五輪で終わっちゃってるんですね、知られているところが。だから、私、自分の研究で必ずこれを言うようにしていて、少しでも知っていただきたいなっていうふうに思います。で、いよいよちょっとこの幸福度についての調査っていうのをやりました。プロジェクトのコア企業から16名をランダムに抽出してやったんですね。分析方法は所謂、幸福度調査って言われているものの質問票を活用して、参加前後の幸福度を計りました。インタビュー調査をKH Coderっていう計量テキスト分析ですね、これは後で読んでおいて下さい。これでやりました。こういった人達に聞いています。所謂、コアメンバー、コア中のコアのメンバー16名ということなんです。で、色んな年齢層もばらばらなんですけど、ここを見ていただくと、年代を見ていただくと、意外に35歳から40歳ぐらいが多いんですね。これね、大田区の若手なんです。よ、実は。若手の世代が多いんですね。アルミだとか材料試験片とか電子製造機器、あと自動車関連用品、丸物製造、食品自動機械、プラスチック、もう業種はばらばらです。ということで、こういう人達に聞きましたっていうことなんですけど、これが幸福度を聞いて

た質問票です。これ人生満足尺度というものと感情的幸福、それから、ポジティブ感情、ネガティブ感情、こういったものを聞いて、後で詳しくは見て下さい。幸福の4因子、自己実現と成長、つながりと感謝、「何とかなる」前向きと楽観、それから独立とマイペースっていうのを聞いています。で、結果です。これ単純に集計した結果です。プロジェクト参加前の幸福度、単純にここの平均と合計を見て下さい。例えば、チームの人生満足尺度315、プロジェクトに関わる前です。こっちは関わった後で386、前者は平均が20、後者が24です。で、トータルすると合計が前者が1,876、後者は2,117、前者が117、後者が132というふうに全般的に上がってるんですね。前と後で。これは単純計算なんですけど、で、そのあとなんです。これは大学生には分かるかどうか分かんないですけど、平均値を調べたものですね。

どういふ結果が出たかっていうと、参加前後の独立サンプルの検定ということで、こういう数値が出ましたということですね。これどういふことかと言うと、本調査の独立サンプルのt検定というのをしたんですけど、最初に有意確率5%以下の結果を示しました。「ありがとう」という因子は、要は有意であると。人生満足尺度は有意であると。ポジティブ感情は有意であると。で、有意確率5%以上の結果は、「なんとかなる」因子は有意な傾向がある。「やってみよう」因子は有意な傾向がある。ネガティブ感情は有意ではない。「あなたらしく」因子は有意ではない。じゃあ、これどういふことですか。以上の結果でプロジェクトは、「ありがとう」という因子、ディーナーの人生満足尺度、ポジティブ感情には正の影響があります。しかし、「なんとかなる」因子、「やってみよう」因子には正の影響の可能性があります。一方で、ネガティブ感情、「あなたらしく」因子には影響がないっていうことが言えます。で、ネガティブ感情に影響がないことによ

で、プロジェクト参加前後において構成員がネガティブな感情に変化は見られなかったということですね。これ決して悪いことじゃないんですよ。「あなたらしく」因子に影響がないことから、プロジェクト参加前後で集団の中での個の尊重は変化が見られないっていう解釈になりますね。

で、計量テキスト分析っていうのはやりました。インタビューをやったんですけど、その中から頻出ワード、たくさん使われているキーワードを抽出しました。そしたら、「できる」「すごい」「良い」、それから、「楽しい」「面白い」、あと、「頑張る」。こういった非常にポジティブな感情を表すワードが上位を占めました。一方、この「駄目だ」とか「悪い」というネガティブな感情を表すものは上位に出現しなかったということなんです。頻出するワードの出現パターンの類似したものの線で結んでいきました。これはパソコンがやってくれるんで、ソフトを使えば。例えば、ここに大きな、密接したものがあるんですけども、出現数が多い語ほど大きく、また共起、共に出現する程度が強いほど太い線で描画されます。だから、ここでいくとこれが一番太いんですよ。で、「言う」と「思う」という人の情動を中心としたネットワークが最大の構成となっていて、「言う」から「良い」が派生して、自分を起点に「できる」とか「すごい」とかポジティブな感情が結び付いています。「考える」「変える」も自分から派生しています。で、自己組織化マップっていうところなんですけど、関連の強い語ほど近くに配置されるってことなんです。では、こういうマップ状になってるんですけど、この色が変わってるところ、関連が強いものがマップになってるんですね。「考える」「見る」「思う」「聞く」等の情動を中心としたワードが近くに布置して、また同階層に「良い」「できる」のポジティブ感情があり、「大変」というワードが離れたところに配置されている。また、仕事の階層に

「下町ボブスレー」「プロジェクト」「1番」「関わる」「楽しい」が近くに配置されていて、「変わる」という階層に「今」「大田区」っていうのがあるのも非常に特徴的であるということなんです。これらを見てどう考えるかっていうようなことなんですけど、計量テキスト分析の結果、頻出ワードはポジティブ感情を表すキーワードが多数を占め、ネガティブ感情を表すワードは極めて稀だった。共起ネットワークって繋がりの強いネットワークから、人や情動を表すワードから発生して、自分を起点にポジティブ感情と変化のワードが結びついていました。自己組織化マップでは人の情動を表すワードの近くにポジティブ感情が配置されていました。「変わる」という階層には、「今」「大田区」があるのは、地域におけるこれは変革の息吹じゃないかというふうに受け止められます。ということと結論です。

プロジェクト参加前後の幸福度調査の分析の結果、水平ネットワーク型プロジェクトへの参加により、地域活性化を促す重要なファクターとして、構成員の幸福度が高まる傾向がある。これまず実証というところじゃないんですよ。傾向があるということが実証されました。計量テキスト分析の結果、頻出ワードはポジティブ感情を表すワードが多数を占め、ネガティブ感情を表すワードは極めて稀でした。で、幸福度調査の結果を反映する要因が、計量テキスト分析においても多いというふうに考察されます。ということは、これは企業連携による水平ネットワークプロジェクトの参加が、地域産業の活性化と新産業創出という発展を図るために有効であると。で、プロジェクトが発展していく中で、構成員の幸福度が高まると。こういう仮説が実証されたということで、一応これらの研究も私の研究です。今後の課題なんてずらずら書いてありますけど、こういった事例を色んな地域で幸福度調査の前と後でやってみて、本当に幸福度は高まる、幸福になれるものなの

かっていうところで、ちょっと実証実験してみたいなっていうところですよ。で、内発的な動機付けによって企業連携プロジェクトを生み出す社会システムの構築を明らかにして行って、それを色々な地域でも当てはめられることによって、他地域の産業活性化へ繋げていくことが今後の課題だと思っています。で、実はそれを今、墨田区でもやっているっていうのもあるんですね。

あともう1つだけ事例を紹介します。「共創力創発のための対話型映画の提案」ということで、NPO法人ワップフィルムが「未来シャッター」という映画を作りました。これについてちょっとだけお知らせします。私がこれ研究してみようと思ったのは、監督の言葉だったんですね。「映画は誰のものなのか」ということを説いていたんです。「映画は誰のものなのか。関わった人々、鑑賞者を幸せにしているのか。宗教、政治、企業競争利益等を越境しながら、未来世界は対話で善い社会を築いていきたい。」これね、キーワードが対話なんです。共創の定義っていうのがちょっと書いてありますけど、共創とは商品やサービスなどを、多様なステークホルダー、ステークホルダーというのは利害関係で、1つの物事に対する利害関係者。これと共に創る仕組みであるということなんですね。で、日本の映画産業の現況ということで書いてあるんですけど、この4つに大体大別されますでしょうというのが、研究報告書から出ています。例えば、他のメディアの強い販促力とタイアップすることによって売れる。シネマコンプレックスという主にショッピングセンターと併設された大規模な複数映画館で上映されることで、選択の多様性が深まった。あとはフルデジタル化の波ですね。もう今、アナログ映写しているところなんてほとんどないかもしれないですね。画像処理、あと短時間で作れるっていうのですね。あとフィルムコミッションの台頭。これフィルムコミッションっていうことなんで

すけど、行政主導型の非営利組織が事務局を担当して、映画撮影などを誘致して、撮影が支援をすることによって、地域活性化とか文化振興とか観光振興を図ることを狙いにしていて、2000年以降これが増えてきたんですね。そういえば、つい最近、何だっけ、「カメラを止めるな！」観たことあります？すごく話題になりましたよね。あれもすごい低予算で作られていて、ワンカメラでずっと撮ってるんです、本来ありえないですよ、ああいう手法。でも、可能性っていうか、作り方の枠を越えたというところで、あと起承転結の大どんでん返し、それを見事に演出したっていうことで、すごく話題になりました。で、この「未来シャッター」というのは、中小企業の経営課題の解決のためのツールとして有効であって、対話により地域活性化促進に寄与するっていうところが注目をされています。で、この映画の非常に特徴的なところは、この2番目に書いてある点なんですけど、従来型の地域映画と異なって、鑑賞後必ず対話をするんですね。フューチャーセッションって言って対話をするんです。で、鑑賞者、主催者、製作者、出演者が各々の立場を越境して、新たに次のアクションに繋げていく。これが非常に新しいんじゃないかというふうに言われています。で、従来型の映画との違いなんですけど、商業映画会社のタイアップはまず、全く行ってないんですね。それから、シネコンのような大型映画館の上映ではなくて、主に口コミによる各地での自主上映。それから、デジタル化の波を受容して制作しながらも、上映後のアナログな対話を重視している。それから、行政指導をとらずに、足でステークホルダーを拡大して地域活性化に寄与している。だから、この制作関係者がネットとか使わずに、一軒一軒足で歩いて、「協力して下さい」とって口説きに行ってるって、そういう感じでしたね。

で、経緯からみる特徴というところがちやっと黄色く書いてありますけど、作り方

がおかしかったんですよ。リージョンフィルムディレクター養成講座っていうのを大田区で開催して、これを大田区でロケハンして、シナリオメイキングして、それから、合宿して、そこで作り上げていった。それで、これを大田区と藤沢でやったんですけど、脚本の制作会議、脚本も何人かを合体させて脚本を最終的に作っている。で、「未来シャッター」というものができましたと。で、ラッシュの試写会をやったんですけど、ラッシュっていうのは普通、まだ全然できてない、試作段階なので、普通は一般の人に見せないんです。でも、見せて意見を聞きながらやっていったっていうところなんですね。講座の主旨は地域映画を企画・開発することによって、市民が地域の未来を考え、語り合い、共有し、地域課題を解決していこうとしていくことから、全10回開催したということなんですね。受講者の中から企画・脚本まで、最終的には受講者6名のアイデアから脚本ができました。主要なテーマは「マージナルマン」。これは心理学の用語で使われてるんですけど、境界人だとか周辺人というふうにして、「未来シャッター」と命名しました。地域で映画製作のプロセスを全て公開して、人材育成を図ったっていうところもあります。あと制作の途中段階であっても、多様な意見を反映していった。もう色々な人がごった煮的にこの映画を作ったと感じますね。地域の関係者が。その他の特徴的な事例として、1口3,000円のアクションサポーターの寄付を約300名集めました。で、それが資金源となって映画はできていったんですね。あとキャストもプロのアクターと共に、実在の多様な人物が本人役で登場するんですね。で、フィクションとノンフィクションの境界線も定かじゃない。あと宗教を越境しているということもありましたね。仏教法主が主演しているにも関わらず、関東学院六浦の小学校の礼拝堂で上映してしまっただけです。非常にちょっと信じられないことが起こりました。

あと企業競争を越境しました。アサヒホールディングス、キリンビバレッジが協賛し、上映しました。蒲田のキネマ通り商店街っていうところがあるんですね。ちなみに蒲田って、昔のキネマの街だったんです。「蒲田行進曲」という映画あったじゃないですか。キネマの街。そのNPOの拠点、キネマフューチャーセンターで月2回、今も定期上映が行われていて、連続上映も50回以上を突破しています。で、誰が出たか。下町ボブスレー、江戸っ子1号、全日本製造業コマ大戦など、日本を代表する中小企業の3大プロジェクトリーダーが出演しているんですね。この映画で出てきます。それから、中小企業家同友会っていう任意団体があるんですけど、その上映頻度が高く、自社に持ち帰り、社員とそのノウハウを共有していると。で、中小企業連携イベントで、様々なアイデアを抽出しているっていうところも特徴としてあります。あと対話による共創で地域ブランド作りというところなんですけど、沼津の事例なんですけどね、これはキリンビバレッジプレゼンツ「映画『未来シャッター』上映会とものづくりワークショップ」というのを開催しました。ここにもものづくりの色々な、沼津工業高校とか出てますね、専門学校とか、沼津信金とかね、色々出てるんですけど、地域ブランド開発のための対話ツールとしてこの作品を活用しました。深海ドローンや深海魚と富士山を配したキャラクターブランド作りのアイデアが提出され、今後もその実行策について検討していくということで進んでいます。「未来シャッター」の構造なんですけど、2軸で捉えた場合にどういうふうなのか。横軸はターゲットで、縦軸はビジョン、目的。だから、「未来シャッター」は2軸の領域を満遍なくカバーしているっていう、そういう特徴があります。で、対話による気付きっていうことなんですけど、簡単に言ってしまうと、社会と個人がかけ離れて、最初かけ離れて、あんまり交わることはなかったっ



ということがあったかもしれません。それがこの映画を観て対話することによって、個人がそれぞれ課題に気付くわけですね。3番目、その課題でできることを考えるわけです。最後はその課題が個人、個人が課題に気が付いて動き出すことによって、ウェルビーイング、所謂、幸せを探していくっていう、そういうことに繋がっていきます。

下町ボブスレーとの構造比較なんですけど、下町ボブスレーっていうのは中小企業連携のネットワークが繋がって、それを外に向けていっている。「未来シャッター」っていうのは、最初から外に向かっているっていうような状態なんです。最初から外に向かって、小さなネットワークがまた、できつつあるというところなんです。で、これもちょっと計量テキスト分析をしたんですが、ここだけちょっと紹介していきますね。頻出抽出ワードリスト。Aが「人」、「自分」、「思う」、「感じる」、「シャッター」、「地域」、「境界」、「未来」、「心」。これはこの「未来シャッター」っていう映画のテーマと相当被っています。で、出現パターンが似通っている共起ネットワーク。共起の強さの核は、「自分」、「思う」、「シャッター」、「感じる」、「映画」、「人」。で、「自分」を起点として「思う」が結び付いて、その延長線上に「地域」とか「活性」とか「テーマ」に伸びている。「シャッター」の延長上に「開く」、「心」、「未来」、「考える」が他のワードで結び付いている。そういう状況ですね。これもちょっとざっと、後で

見ておいて下さい。ということで、共起ネットワークから「自分」を起点として「思う」が結び付き、周縁にある「人」の延長戦上に「地域」、「活性」、「テーマ」がある。「シャッター」の延長上に「開く」があり、「心」、「未来」、「考える」が他のワードとも密接に結び付いているというところですね。自己組織化マップでは、本作の主要テーマの「マージナルマン」、要は「境界人」という、その近くに「地域」、「広げる」が配置されているということですね。で、この制作経緯からマルチステークホルダープロセスで制作されたことが明らかで、中小企業の経営課題の解決のためのツールとして有効である。で、対話により地域活性化促進に寄与すると考察できるのではないかとということですね。今後の課題なんですけど、これ色々な地域の色々なパターンでやってみた時どうなのかっていうのは、今後ちょっと確かめていきたいなというふうに思っています。

最後に、より良い未来社会にするためにはどうしたらいいか、ちょっとだけ考えてみたいと思います。新たな経済社会の駆動モデルが必要だろうということなんです。個人が自由な意思で意欲的に活動することが社会全体の安定的な発展に繋がる仕組み。例えば、無形の価値の尊重とか、共感、感動、幸福。こういうものって無形の価値ですよ。共感、感動、幸福なんて形のないものですよね。あと多様性、ダイバーシティの尊重。こういうことが大切にされるのではないかと。うふうに思います。で、このマーク、最近よく見ると思いませんか。SDGs、持続可能な開発とイノベーションということなんですけど、2015年、国連は17項目からなる、持続可能な開発、SDGsの概念及び、この企業行動指針を提示しました。2014年、OECDは成長と社会課題を両立させるイノベーション戦略を公開しました。社会は変わってきていますよね。持続可能なものってどうやったらできるの。持続可能っていうのは、そこに永

遠にあり続けるものですよ。それには多様性と包摂性っていうのがとっても大切なんじゃないかというふうに考えます。誰一人取り残さない多様性と包摂性のある社会の実現。例えば、こども食堂っていうことを先程言いました。あれは子供の貧困対策を考えて、ある1人の八百屋のオーナーが考えたことから、全国3000ヵ所にスピルオーバーしています。これ誰一人取り残さないってことなんです。絶対的貧困と相対的貧困ってあるんですね。絶対的貧困っていうのは、食うに困るんです、要は。生活の最低限のレベルが維持できないっていう。だから、アジア諸国の貧困なところは割とその絶対的貧困国が多いんですね。日本の場合は、先進国に多い相対的貧困なんです。例えばね、皆さん大学生でしょ。大学生ってことは、高校通ってると大学生になれますよね。今、日本の高校の進学率ってどのくらいだと思います？90%なんです。90%に漏れた人は、やっぱり相対的な貧困になってしまいますね。ある一般のその国のレベルの10%に満たない人達を、10%に入らない人達をやっぱり相対的貧困って言うんですね。相対的貧困って国によっても変わって、イギリスなんかではティータイムを楽しめる時間がないなんていうのも相対的貧困って考えるらしいです。国の文化とかその国のその社会状況によって全然違うと思うんですけど。社会の持続可能性と個人の幸福っていうのは、本当は一致させなきゃいけないのね。未来社会の望ましい方向性として、同時に考えていく必要があるだろうと。個人と社会と経済と環境、これはやっぱり全部同時に考えていって、参加と繋がりとか、その多様性を考えていったり、容量とか資源、これ限られていますよね。これも考えていけないといけない。だって、その資源は限られてるって、原発のときに本当そう思いませんか？流通がね、届かない。電気がない。電力が来ない。あと空間的公平性。他の地域の豊かさを奪わずに、自らを発展させ

る。で、時間的公平性っていうのは、次世代に豊かさを奪わずに現在を発展させるということなんですよ。みんな、みんな幸せになるって、簡単に言ってしまうばそういうことなんですよ。奪わない、シェアする、そんなような考え方ですよ。じゃあ私達は未来のために考える。地域はどうあるべきか。自分はどう行動するか。ということで、今回の私の話から少しだけそれを考えるきっかけ作りをしていただけたら、ありがたいと思います。

ちょうど時間になりました。どうもありがとうございました。ちょっとはしょっちゃいましたが、ありがとうございました。

